一度目は勇者、二度目は魔王だった俺の、三度目の異世界転生

Ichidome wa Yusha
Nidome wa Maou datta Ore no
Sandome no
Isekaitensei

塩分不足
enbunbusoku
著

主な
Main Characters
登場人物
リルネット
目に不思議な力を持つ
異国の少女。
アイネ
レイブが使役する幻獣
ヒポグリフ。
クラン
魔法学園の新入生。
魔銃という珍しい武器を操る。
エレナ
魔法学園の学園長。
世界に五人しかいない
Sランク魔術師の一人。
アリス
リルネットに仕える
メイド。基本的には
いつも敬語。
レイブ
勇者・魔王を経て、
三度目の転生を果たした青年。
三度目の人生をどう生きるべきか
悩んでいる。
ムウ
謎の黒猫。
よくしゃべる。

プロローグ

ある日、俺は異世界に勇者として召喚された。
平和な世界で平凡に生きていた俺が、なぜ選ばれたのか未だに謎だ。
なんでもこの世界には魔王がいて、人間達の住む領域を脅(おびや)かしているらしい。つまり俺に、その魔王を倒してほしいという話だった。
ファンタジー小説では実にありがちな展開だけれど、これは現実に起こったことだ。
それから俺は、勇者として世界を旅した。
聖剣を持ち、多くの仲間を得て、各地を回った。
途中、魔王の幹部達との戦いを経て成長し、数年かけてようやく魔王の城にたどり着いた。
元々俺は、魔王に対してなんの感情も抱いていなかった。勇者として魔王を倒すことが当たり前だと思っていたのだ。しかし、旅を続ける中でその考えは変わった。
道中で俺が見たのは……なんの力もない人々が、罪のない子供達が、魔族に殺されている光景だった。
そんなものを見せられれば、誰だって怒りが生まれるだろう。加えて俺は、共に旅した仲間を失

い、怒りどころか恨みさえ抱くようになっていた。
それでも俺は勇者だ。
恨みのような感情で剣を振り下ろすわけにはいかない。だから俺は、こみ上げるそうした感情を必死で抑え込み、人々を救うため、との思いだけで魔王と戦った。
激しい戦闘が繰り広げられた。
戦いの中、俺は魔王に尋ねた。
なぜ多くの人々を殺したのか。どうしてそれ以外の方法を考えられなかったのか。結局、何を目指していたのか。しかし、その答えが出る前に戦いは終わった。
結果は言うまでもなく勇者の勝利だ。魔王と勇者が戦えば勇者の勝利で終わる。どこの世界でも、結末は変えられないらしい。しかし、俺もまたこの戦いで重傷を負い、そのまま世界を去ろうとしていた。
悔いはないといえば嘘になる。魔王を倒した後の世界を見たかったとも思う。
それでも、自分の役割は終わったのだと、俺はほっと胸を撫で下ろし、息を引き取った。

† † †

それから三〇〇年後、俺は再び同じ世界に生を受ける。

なぜか以前の記憶を持ったまま転生した俺は驚愕する。
勇者だった俺は、なんと悪魔として生まれ変わっていたのだ。
俺はこれからをどう生きていけばいいのか考えた。
魔界には魔王はいないらしく、俺がいるのは魔王城のようだが、以前の殺伐とした雰囲気は感じられない。
ふと、俺は自分の未練を思い出す。
俺が救った世界は、どうなっているのだろうか？
これからの生き方を決めるのは、それを確認してからでもいいだろう。そう思った俺は、さっそく調べることにした。
過去の出来事が記載されている本を読み漁り、古い時代から生きているという悪魔達に尋ねてみる。そうして俺は知った。知りたくもなかった酷く愚かな現実を……
俺が魔王を倒したことで、世界のバランスは大きく崩れてしまったらしい。
人間達は勇者の勝利に勢いづき、魔族の領地に侵攻した。対して魔王という柱を失った魔族達は統率を乱し、為す術もなく敗れ去った。
人間と魔族のパワーバランスは逆転し、魔族達は住処を失った。
奪う側だった魔族達は、人間に怯えて生活するようになった。それでも人間達の侵攻は止まることなく、さらに領地を拡大させていく。

人間に虐げられたのは、魔族だけではなかった。
あろうことか人間は、獣人やエルフまで標的にしたのだ。
人間は自分達と違うというだけで他種族を差別し、虐待を繰り返した。それは、かつて魔族達が人間にしていたことと同じだった……
しかし俺は、まだ信じられずにいた。
何かの間違いだ、きっとそんなことはない、そう思おうとした。だから俺は、実際にその現場を見て確かめることにしたのだ。
そして、俺は思い知らされた。間違っていたのは、自分のほうだったという現実を……
俺が目にしたのは、罪のない魔族達の村を焼き払い、住人の魔族の首を刈り取り、それを掲げて高笑いする人間の姿だった。そこには、かつて自分の背で怯えていた弱く脆い人間などいなかった。以前の俺が邪悪と定めた悪魔達よりも、彼らは邪悪だった。
こんな奴らのために、俺は戦ったのか？
溢れんばかりの後悔が俺を襲った。
それから俺は、これからどう生きていくか考えた。そして、結論は簡単に決まった。
魔王になる――
それ以外に思いつかなかった。

かつて勇者として、俺は魔王を倒した。人々が平和に暮らせる世界を作るために戦った。だが、その結果がこれだ。人間と魔族、互いの立場が逆転しただけで、何も変わっていない。
俺は初め、魔族だから邪悪な心を持っているのだと思っていた。でも実際は違った。人間も魔族もそんな心は等しく持っているのだ。かつては、魔族にその傾向が現れやすい状況だっただけのこと。
このまま人間を放置しては、魔族や亜人はこの世界から消滅させられるだろう。その原因を作ったのは、俺だ。
だから、俺は責任を果たさなければならない。勇者としては平和な世界に導くことはできなかったが、魔王としてならできるかもしれない。
俺は、魔王になるため立ち上がった。
幸いにもその資格は持っていたらしく、俺は瞬く間に魔王となった。
俺はすぐに多くの仲間を率いて、奪われた領地を取り戻すために人間の領域に侵攻。勇者だった頃のように、俺は敵の領地に進軍していった。
程なくして、人間側に勇者が誕生した。
それをきっかけに人間達は奮い立った。俺が戦いで得た領地は奪い返され、このままではいずれ魔王城まで侵攻してくる。そうなれば多くの同胞達が殺され、死体の山を築くだろう。
それではかつてと変わらない。また同じことを繰り返してしまう。その展開だけは避けなければ

ならない。
しかし、魔王が勇者に倒されるという結末はやはり変えられないようだ。遅かれ早かれ、俺はこの世界から退場することになるだろう。だったら、俺は死から逃げない。
人間と魔族、互いの領地が半分ずつになった頃、俺は戦いを止めた。人間の領域と魔族の領域の境界線には巨大な渓谷があったが、その手前に高く長い壁と大きな城を造り、そこで俺は勇者を待った。
やがて、勇者が城へ攻め込んでくる。俺は予め備えておいた罠を使い、勇者を仲間から分断し、一対一の状況を作ることに成功した。
そこで俺は、勇者と対話した。
これまでのこと、これからのことを話し、そして俺は勇者にこう願った。
どうか、俺と同じ過ちを繰り返さないでくれ。
お前が、人々を導いてくれ。
かつて俺が失敗した理由。それは、俺が死んでしまったことだ。その結果、俺は人々を正しく導くことができなかった。先頭に立って、人々を導いていく。勇者とはそういう存在なのだ。
かつて、柱を失ったのは魔族だけではなく、人間達もだった。それ故、彼らは歪み、誤った道へ進んでしまった。
俺は、勇者に伝える。

魔王である俺は、ここでお前に倒される。その後のことはお前に任せよう。魔族側のことは心配しなくてもいい。すでに腹心にすべてを話し、了承は得ている。初めは反対されたが、皆、俺の理想に賛同してついてきてくれた者ばかりだった。最後には俺の願いを受け入れてくれた。
そして、勇者は魔王を倒す。
勇者は俺の最期の願いを聞き入れ、必ず実現してみせると誓ってくれた。俺は安堵し、再びこの世を去った。
そして、異世界での二度目の人生を終える直前に俺は思った。
もしかしたら、かつて俺が倒した魔王も、同じ境遇だったのではないか？
今ではもう確かめようがないけれど、魔族達と触れ合い、そのすべてが邪悪でないと知ったことで、そんなことを思うようになっていた。

† † †

それから七〇〇年後。
異世界での一度目の人生から約一〇〇〇年が経った頃。
俺は三度、この世界に降り立つことになった――

1　三度目の人生

森と草原に囲まれた場所に小さな村がある。
人が住めるほどの大きさの建物はわずかに十数軒しかない。本当に小さな村だ。
「それじゃー父さん、母さん！　いってくるよ！」
そのうちの一軒から、クワを持った青年が飛び出す。灰色の髪と銀色の瞳をした青年は、一直線に駆けていった。
「いってらっしゃい！　気を付けてね、レイ」
母に見送られ、青年は振り返ることなく畑へと向かった。
彼の名前はレイブ・アスタルテ。今年で一五歳になる、人類種の青年である。
「さて、今日も頑張るかな」

†　†　†

どうも初めまして。

先ほど紹介された村人のレイブだ。両親や村の人達からは、レイと呼ばれている。基本的には毎日畑仕事をしていて……
「おーい！　レイ、ちょっといいか？」
俺のもとへ、村人が一人駆け寄ってくる。
「おはようございます。どうしましたか？」
「実は村の近くまで魔物が来てるみたいなんだ！」
「魔物ですか？」
「ああ、すまないが、また頼めるか？」
「わかりました。今から行くので安心してください」
申し訳ない。話の途中だったと思うが、急用ができた。
先にそっちを終わらせよう。

†　†　†

レイブは畑仕事を中断し、腰に剣を装備して森へと向かった。
「この辺りかな」
歩みを止めるレイブ。すると、そこへ三つの影が迫る。

赤い眼を光らせて現れたのは、三匹の黒いオオカミ。ダークウルフと呼ばれる魔物である。
「よし――【強化魔法：ギムレット】！」
レイブがそう唱えると、彼の身体を光が包む。それから彼はゆっくりと腰の剣を抜き、呼吸を整えるように長く息を吐く。
「来い！」
一斉に襲いかかる魔物。レイブが息を止めると、その直後、彼の姿は魔物の視界から消えた。
レイブは、魔物達の後ろに立っていた。
剣を鞘に収める。
それと同時に魔物達は両断された。
目にも留まらない斬撃で、彼は魔物を斬り伏せたのだ。
「これで終わりだな」

† † †

おっとすまない。
こんなタイミングで恐縮だが、さっきの話の続きをしようか。
俺の名前はレイブ。この村で育った人間で――元勇者で元魔王だ。

俺は、初め勇者として召喚された。そこで俺は、人々を苦しめていた魔王を討伐し、役目を終えてこの世を去った。
それから約三〇〇年後、再び俺はこの世界に転生する。今度は、悪魔としてだ。最初はかなり戸惑った。勇者が悪魔に生まれ変わるとは、なんて悪夢だと嘆いたりもした。でも、人間達に虐げられる魔族達を見て、自分が間違いを犯していたことに気付いた。
それから俺は、魔王になって世界をより良い方向に導こうとした。そして最期、新たな勇者にすべてを託し、俺は二度目の生涯を終えた。
それから七〇〇年後、最初の召喚から一〇〇〇年後に俺は三度、転生を果たす。
俺の経歴をざっくり説明するとこんな感じだ。
そして、今は三度目の転生から一五年と数ヶ月経っている。
まさかまた転生するとは思っていなかった。でも正直三度目ともなると、あまり驚きもしない。
転生していたことに気付いたのは物心がついた頃。すぐに俺は冷静に状況を分析した。
今はどんな世界になっているのだろうか？
俺は、世界がどう変わったのか確かめることにした。そして、一五年この村で生活する中でわかった……どうやら、俺は正しい選択ができていたらしい。
かつて互いに殺し合うだけだった人間と魔族が、今では共に助け合って暮らしていた。
まさに、俺が夢にまで見た光景だった。

小さな争いやイザコザはあるものの、以前のような人間界と魔界を巻き込むほどの争いは起きていなかった。七〇〇年の間一度も。
しかし、だからこそ疑問がある。
この平和になった世界に、俺は転生させられたのだ。それも——勇者と魔王の力をそのまま受け継いだ状態で……
ありえないだろ？
これだけ平和な世界に、どうしてこんなチート能力が必要なんだ？
明らかにおかしい。異常としか言いようがない。
もしかしたら、この平和な世界にまた何かが起こるのかもしれない。
そう考えて、俺は何年も身構えていたが……転生してから一五年経った現在も世界は平和を維持している。
そもそも、俺が生まれた場所は辺境の土地だったし、種族も家柄も普通だ。それにもかかわらず、俺の能力は無意味にチート状態だった。
いや別に、力があることには不満はない。
さっきみたいに魔物から村を守ることができるし、むしろ便利ではある。
ただ——
俺は一体、三度目の人生をどう生きればいいんですか？

2　さよならは突然に

「村を出る気はないか？」
「え？」
いきなり村を出ていけと言われた。
どういうことなんだ一体！
村長に呼び出されて来てみたら、なんか村長だけじゃなくて村の皆がいた。
ものすごく空気が重いから村の一大事か？　とか思っていたら、突然そんな話をされたわけだ。
全くこの状況についていけないぞ。
「ちょ、ちょっと待ってください！　どうして急にそんなこと……」
俺、何か悪いことでもしたのかな？
いや、全然身に覚えないけど。むしろ俺は、良いことばっかりしてるはずなんだけど？
もしかして元魔王だってバレたのか？　それとも気付かないうちに大罪でも犯してたのか!?
「それは俺から説明しよう」
そう言って前に出てきたのは——

「父さん……」
この人は村長の息子、そして俺の父親だ。
父さんは神妙（しんみょう）な面持ちで告げる。
「レイブ、急にこんな話をしてすまない。勘違いしないでほしいんだが、俺達はお前を追放しようとしているわけじゃないんだ」
「じゃあ、どうして……」
「それは……お前が才能のある人間だからだ」
「え？」
「俺はこの一五年間、ずっとお前を見てきた。だからこそわかる！　お前は俺達のような凡人とは違う。選ばれし者だ」
才能？　選ばれし者？
この人はいきなり何を言っているんだ？　そんなこと言われても……
「うん、そうだね」としか言えないだろ!?
知ってるよそんなこと！　こっちは人生三回目だぞ？
嫌味ではなく、これだけ人生繰り返してたら嫌でも自分が選ばれまくっていることはわかる。
「俺は魔法についてそこまで詳しくない……にもかかわらず、お前は教えてもいないのに魔法を使いこなしている」

まぁ元魔王ですしね？
普段はあまり目立ちたくなかったし、現在この世界では魔法の使用にいろいろと規制があるらしいから派手には使ってないけど、魔王の時の力もそのまま受け継いでるからな。ちなみに、普通の人間じゃ使えないような魔法も使えるぞ？
「魔物と戦えるほどでないにしても、武術に関しては俺も自信があった。だからお前を鍛えようと指導をしていたが……お前はあっという間に俺を超えていった」
いや元勇者ですからね。
曲がりなりにも聖剣使ってましたし。というか、今も持ってますし。体格の差があった頃は、父さんにも勝てなかったけどね。
「そんなお前が、こんな辺境の村で一生を終えることを、俺はもったいないと思ったんだ」
「父さん……」
これが、子を持つ親の気持ちというやつか……
三度人生を繰り返している俺にもわからない感情だ。二度とも俺は、誰かとの子を残す前に死んでたからな。そういう意味では、悲しい人生だったとも言える。
「俺は父として、お前にもっと才能を活かしてほしいと願っているんだ。だから……王都に行ってみないか？」
「王都？」

王都とは、人類種の国、イルレオーネ王国の中心都市だ。なんと世界人口の約五分の一が、そこに住んでいる。
今は種族間の争いがなくなっているのに、どうして人類種の国があるのか、疑問を持つ人もいるだろうか？
一応説明しておくと、確かに種族同士の蟠（わだかま）りは解消されている。しかし、それと生活スペースを異種族で共有できるかは別問題だ。
簡単な話、種族が違えば習慣が違うし、信仰も考え方も違う。それ以前に、生きやすい環境が違うのだ。それを無理やり一つにまとめるのはナンセンスだろう？
そもそもこの世界は、一つの大きな大陸で形成されている。
大陸の中央を縦断する長い渓谷があって、それを境に東側が人間界、西側が魔界となっている。これは七〇〇年前の争いでそうなって以来、ずっと続いているのだ。
魔族や亜人種のほとんどは魔界で生活していて、人間同様に国を形成している。ただ、完全に住み分けられているわけではない。人間界で生活している魔族もいるし、その逆もいる。
ここまでの情報は、時折村を訪れる旅人や商人から教えてもらったものだ。今の俺にはこれ以上のことはわからない。
話を戻して、俺は父さんの顔をまじまじと見る。
「王都ってことは、もしかして……」

「そうだ！　俺はお前に、王立魔法学園への入学を勧める」
王立魔法学園。
イルレオーネ王国直属の機関で、人類種側で唯一の魔法教育を行っている施設である。
現在この世界では、再び大規模な争いが起こらないように魔法の使用が厳しく制限されている。魔法を自由に使うには、特定の教育課程を修了し国家魔術師になる必要がある。そのための教育機関こそ、王立魔法学園なのだ。
父さんが真剣な眼差しで言う。
「二ヶ月後にはちょうど入学審査がある。それを受けに行ってみないか？」
「王立魔法学園……国家魔術師か――」
父の話に興味がないわけじゃない。
国家魔術師になれれば、自由に魔法が使えるようになる。
正直これだけ魔法の能力があるのに、人前で自由に使えなかったのはなかなか不便だった。それに、王都という場所にも興味がある。決して悪い話ではない……
だけど――
「俺がいなくなったら、村の守りはどうなる？」
この村には時折、野生の魔物が近づいてくる。それを撃退するのは俺の役目だった。というのも、村には俺以上の強者はいない。それどころか、魔物とまともに戦える人間なんて一人も……

「俺が村を出たら、魔物の相手は誰がするんだ？」
三度目の人生とはいえ、俺はこの村で育った。それなりに愛着はある。村が危険に晒されるとわかっていて出ていけるほど、俺は恩知らずじゃない。
そう思っていたんだが、父さんは首を横に振って言う。
「その心配はない」
「え？」
「実はな？　もうじきこの村に王都から兵士が来ることになっているんだ」
「それは……なんで？」
「お前も知っていると思うが、この村は農業が盛んだ。規模こそ小さいが、品質のいい農作物が収穫できる。それらを王都や他国に売ることで村の生計を立てているんだが、以前王都で取り引きした作物が大変気に入ってもらえてな」
確かにこの村の農作物の品質は良い。
日本の農業を知っている俺から見ても、今の農業技術は素晴らしいものだ。
特に、ここみたいな小さな村には農業の知識を持っている人が多い。だから、意外と田舎や小さい村の作物のほうが、都会に比べて高品質だったりする。
「王都の偉い人に村の事情について聞かれて、魔物に困っていることを話したんだ。そしたら、兵士が来てくれるだけでなく、村に結界を置いてもらえるように話をつけてくださってな」

「結界だって？」
この世界には様々な魔道具が存在している。その中でも結界は高級品だ。
本来結界を張る場合は、基点となる場所に魔法陣を展開し、そこへ魔力を流す必要がある。連続で使用する場合は、ずっと魔力供給をしなくてはならないのだ。少なくとも、七〇〇年前はそうだった。
しかし今では、自然界の魔力を利用する技術が発達している。
それが、結界の魔道具である。この特殊な装置によって、結界は簡単に運用できるようになった。ただし、装置を作るのにはそれなりの時間と素材が必要で、大量生産は難しい。だから今でも、結界の魔道具を使っているのは主要都市や特別な場所だけなのだ。
それをこの村に置くなんて、ずいぶん太っ腹な奴もいたもんだな。
俺は感心したように言う。
「なるほど、確かにそれなら魔物に関する心配はいらないな」
村に出没する魔物はそこまで強くない。だからといって生身の人間で対処するのは厳しいが、結界を破壊できるほどの魔物は今のところ来ていない。結界さえあれば、この村の人々が死ぬようなことにはならないだろう。
「レイブ、まだ不満はあるか？」
「……」

俺は大きくため息をついた。
まったく、ここまで入念に準備されていては断れないだろ？　まぁ俺を王都へ行かせるためにやったというわけでもないだろうが。
「わかったよ。父さん」
こうして俺は王都へ行くことを決心した。
王都にも国家魔術師にも興味はあったし、それ以上に、今の世界を自分の目で確かめたいという気持ちがあった。
ちょうどいい。この機会に世界中を見て回るのも悪くない。
満足したらまた、この村に帰ってくればいいんだから。

†　†　†

それから二日後。
東から昇った太陽の光が、旅立つ俺に降り注ぐ。
村の皆は、俺を送り出すために集まってくれていた。
父さんが声をかけてくる。
「レイブ、本当に馬車は必要ないのか？」

「うん」
この村から王都までの距離は、徒歩で行こうと思えば数ヶ月はかかってしまうほど遠い。馬車でも一ヶ月は必要だ。
王立魔法学園の入学審査はもう二ヶ月後に迫っている。徒歩では間に合わないだろう。
当たり前のように父さんは心配してくる。
「しかし審査は二ヶ月後だぞ？　間に合うのか？」
「大丈夫だよ父さん。この村にある馬車は一台でしょ？　それを借りるわけにはいかないよ」
「確かにそうだが……いや、お前が言うのなら大丈夫なのだろうな」
「うん、大丈夫。それに良い機会だし、王都に行くまでにいろいろ見てみたいと思ってるんだ。あと……」
俺は懐（ふところ）から、とある笛を取り出した。
「徒歩で行くなんて、俺は一言も言ってないよ？」
俺はそう言って笛を口に咥（くわ）え、息を吹き込む。
笛の音が村中に響き渡った。
「一体何を……」
空から鳴き声が聞こえてくる。
見上げると、凄まじい勢いで何かが接近してきている。巨大な翼を持つそれは、激しい突風を

纏(まと)って降り立った。
父さんが驚いて声を上げる。
「こ、これは――グリフォンか!?」
グリフォン――それは鷹(たか)の翼と上半身、ライオンの下半身を持つ「魔物」……ではなく、神々によって創造された、黄金を守護する「神獣(しんじゅう)」である。
神獣と呼ばれる生物は、一〇〇〇年前は当たり前のように生息していたが、今では全く見なくなってしまった。その理由は、争いを繰り返したことによって地上にいた神々が天へ帰ってしまったから――と言われている。ではなぜ、目の前のこの生物はまだ存在しているのか？
その理由は、こいつは神獣ではないから。
「違うよ父さん、こいつはグリフォンじゃない」
「そ、そうなのか？　なら一体……」
「こいつはヒポグリフ、名前はアイネだよ」
ヒポグリフは、グリフォンと雌馬の間に生まれたとされる生物で、鷹の翼と上半身、馬の下半身を持つ。グリフォンとの違いは、下半身が馬であるということ、そして神獣ではなく「幻獣(げんじゅう)」であるということ。
本来存在するはずのない獣――故に幻獣と呼ばれている。
「というわけで、王都にはこいつに乗っていくよ！」

ヒポグリフを前に、村人達は驚いていた。
父さんが呆れたように言う。
「まったくお前は、俺の心配なんて簡単に吹き飛ばしてしまうんだな」
「うん。それじゃ、いってきます！」
「ああ！　いってこい！　我が息子よ！」
父さんに続いて、母さんや村人達が言葉を送る。
そして、俺を乗せた幻馬は瞬く間に空へと消えていった。

3　英雄は天から降り立つもの

本日は晴天なり。雲ひとつない青空に、一本の長い軌跡が残る。
その姿を見た者は、大空を舞う巨大な鳥と勘違いするだろうか。
「いいぞ」
幻獣ヒポグリフが俺を背に乗せ、空を駆け抜ける。
「やっぱり最高だな！　アイネ！」
幻獣はそれに応えるように鳴く。

「そうかそうか、お前も楽しいか！　思えば数百年ぶりか？　お前の背に乗るのは……懐かしいな」
アイネと出会ったのは、俺が勇者だった頃……つまり、今から一〇〇〇年以上前。
アイネは一緒に魔王と戦った戦友であり、相棒だった。
二度目に転生した時には、召喚の角笛（つのぶえ）を持っていなかったから呼び出せなかったが、なぜか今回は所有した状態で転生することができた。
召喚と名がついているが、実際はヒポグリフに聞こえる音を出すだけで、異界から呼び出しているわけではない。
「さーて、これからどうするかな～」
学園の入学審査は今から二ヶ月後、王都で行われる。
馬車でさえ最低でも一ヶ月はかかるほど遠い場所にあるというのはさっきも言ったが、普通の方法で向かおうと思ったら、まず寄り道なんてできないだろう。
ただこいつなら、俺の相棒なら、その心配はない。
ヒポグリフの最高速度は音速を超える。その気になれば、王都まで一日すらかからないのだ。
もちろん、それだけの速さに耐えられる人間などいない。
今の俺も肉体自体はただの人間。正直、最高速度でなくても厳しい。だからこうやって、強化魔法をかけている。
【強化魔法：ギムレット】――魔物との戦闘でも使用していたこの魔法は、魔術師であれば使えて当然、基本中の基本だ。簡単な魔法ではあるが、使用者によって威力や持続時間が異なる。
ちなみに俺が使えば、聖剣クラスでないと傷つけられないほど硬い体になる。
「このまままっすぐ王都に向かうのはもったいないな」
俺は今日まで村の周囲からほとんど出たことがなかった。村周辺の地域、他の村には何度か行く機会があったけど、それ以上の遠出はしていない。
理由は、あの村で魔物と戦えるのが俺一人だけだったということ。俺がいない間に、村が魔物に襲われたらひとたまりもない。だから、遠方への外出は控えてきた。俺の目の前には、当たり前だが見たことのない風景が広がっている。
一応、村を出る時に世界地図は持ってきたが……
「これじゃ、さすがにわからないな」
田舎だったからだろう。村にあった地図はあまりにも簡素だった。記されているのは、村を中心にした周囲の集落と、王都までの経路のみ。
「まぁ、あの村じゃこれで十分だしな～。よし、仕方がない……」
俺は両目を閉じる。
「【千里眼（せんりがん）】」
そして、閉じた両目を力強く開いた。
普段の俺の瞳は銀色。しかし今は黄金の瞳に変化していた。

千里眼とは魔法ではなく、天から授かった恩恵。生まれつき持っている加護のようなものだ。これも先ほどの魔法同様、所有者によって効果が異なる。
一般には遠くの物が見える程度だが、人によっては壁が透けて見えたり、過去や未来すら見えたりする。
ちなみに俺の千里眼は、その中でも群を抜いて特別だ。
なぜなら、すべてを見抜くことができるから。これは別に比喩ではない。文字通りの意味だ。俺の眼は、俺が見たいと思った物すべてを見ることができる。
自分でもわかっている。ハッキリ言ってチートだ。
「う～ん、特に何もないのか」
周辺を観察してみたが、小さな村や似たような町しかなかった。
この辺りは王都からも遠い。この先数十キロは、今見えた風景が続いていることだろう。
千里眼で王都までの経路を隈なく観察してもいいのだが、それでは旅の楽しみがなくなってしまう。
もう少し進んでみようか。
「よし！　このまま行くぞ、アイネ！」

†　†　†

とある街道を、白を基調とした派手な馬車が走る。
街道の周囲は木々で覆われ、見通しは悪い。道を走っているのは、その馬車一台だけだ。
馬車の中には、二人の少女の姿があった。
「王都までは、あとどのくらいなのかな？」
「おそらく、あと二週間ほどで到着すると思います」
「そっか、意外と早く着きそうだね」
「はい」
彼女達は、王都へ向かっている途中だった。
「国を出発して、もう半月以上経ったんだね……」
「はい」
「これで……良かったんだよね？」
「……」
社内に重苦しい空気が流れる中、不安げな二人を乗せた馬車が急停車する。
「な、何!?」
驚いた二人は不用意にも馬車から降り、外へ出てしまう。そして、その目で見てしまった。
目の前で、御者の男が殺される様を……

そして数分後、武器を持った男達が、壊れた馬車を取り囲むように立っていた。
その中の一人、リーダーらしき男が少女達のもとへと近づく。
「はっはっはっ！　まさか、アストレア皇国の第二皇女、覚姫ともあろうお方が、護衛もロクに付けずに出歩いてるとはなぁ？」
「来るな！」
「おー怖い怖い、威勢だけは認めてやるよ？　だが、もう限界だろう？」
壊れた馬車を背に、メイド服を着た少女が立ち塞がる。彼女の服はすでにボロボロになっていた。
その後ろには、彼女が守ろうとしているもう一人の少女がいた。
後ろの少女がメイド服の少女に言う。
「これ以上は……」
「大丈夫です。なんとかして、貴女だけでも逃がしてみせます……」
「駄目だよそんなの！　この人達の狙いはわたしなんだから、わたしが投降すれば――」
「それは駄目です！」
「でも！」
そこへ、リーダーの男が口を挟む。
「庇い合ってるところ悪いんだけどさ～、そいつは無駄だぜ？　二人とも可愛がってやるからさ！」

男達はゲスな笑みを浮かべている。
そのニヤケ顔のまま、男達はゆっくりと馬車へ近づく。
満身創痍の少女達は、天に願った。
誰か――助けて――
刹那。
激しい突風が周囲に吹き荒れる。
そして、少女達が願いを捧げた天から何かが降り立った。
舞い上がる土煙が晴れると、そこには一人の青年が立っていた。
「俺に助けを求めたのは――君達か？」
少女達の願いは、彼に届いていた。
「だ、誰だてめぇは!?」
突如として現れたレイブに、周囲の男達は動揺する。
二人の少女の近くにいた男の問いかけにも、レイブは意に介さず、少女達のほうへ振り向く。
「大丈夫……ではなさそうだけど、大きな怪我はしていないな？」
状況についていけていないのは、彼女達も襲撃者達と同様だった。

自分達を心配する彼に、上手く言葉を返すことができない。それでもなんとか返事をするため、少女達は首を縦に振った。
「そうか。なら良かった」
レイブはそう言って笑った。
彼の笑顔を見た少女達は、少しだけ緊張が解れたらしい。安堵した表情を見せる。
そこへ男が割って入る。
「て、てめぇ！　何無視してやがる！」
レイブの態度に苛立った男は、彼に怒声を放った。
しかしそれでもレイブは反応を示さない。それどころか、襲撃者達は先ほどまで怯えていた少女達にまで無視されていた。
少女の一人がレイブに問う。
「あ、あの……あなたは一体……」
「ん？　俺か？　俺は――」
「無視すんなって言ってんだろっ!!」
痺れを切らした男が、背を向けたままのレイブに襲いかかる。
剣を両手で振りかざし、力に任せて叩きつける。
「なっ！」

しかし男の剣は、最後まで振り下ろされることなく停止した。
レイブが振り返ることなく左手だけを後ろに回し、親指と手のひらで挟んで剣を止めたのだ。
渾身の一撃を素手で止められたことに驚愕する男。さらに掴まれた剣は、レイブによって粉々に破壊されてしまった。
レイブが告げる。
「邪魔だ」
「――っが!!」
レイブの蹴りが、男の腹部へ直撃する。
それによって、男は遥か後方へ吹き飛ばされていった。
「まったく、女の子との会話を邪魔するなんて、マナーがなってないな」
動揺する男達。レイブが蹴り飛ばしたのがリーダー格だったため、男達は次の行動を迷っているらしい。逃げるべきなのか、戦うべきなのか。レイブの強さを見せつけられて、その程度の判断すらできないでいた。
「悪いけど話は後だな……まずは、この五月蠅い連中を黙らせよう」
そう言ってレイブは男達を睨みつける。
その殺気の乗った眼光に、男達はたじろいでしまう。だが、男達は恐怖に駆られ、我を忘れたまま一斉にレイブへ襲いかかってきた。

レイブは呟くように言う。
「無駄だ」
すると、レイブを中心にして巨大な魔法陣が展開される。
襲いかかろうとした男達は、彼にたどり着くことなく動きを止めた。
周囲には冷気が立ち昇っており、男達は声を上げる。
「こ、これって……【氷結魔法：アイリス】!?」
【氷結魔法：アイリス】――展開した魔法陣内に存在する物すべてを氷漬けにする魔法である。それによって、男達は仲良く固まってしまった。
男達は完全に氷漬けにされ、次々と粉々になっていく。
少女の一人が呆然としたまま呟く。
「すごい……でも、どうしてわたし達は無事なの？」
アイリスは範囲内にいるすべてを対象にする魔法。
発動した本人はともかく、魔法陣の内側にいる物すべてが含まれるはず。しかし、範囲内にいた彼女達は無傷だった。
ここで少女は、自分の下に展開されている別の魔法陣に気付く。
「これは……【反魔法：ラプス】ですね」
【反魔法：ラプス】は、魔法に直接魔法陣をぶつけることで、その効力を失わせる魔法。

レイブはアイリスを展開するのと同時に、この魔法を彼女達の足元へ展開していた。これによってアイリスの効果は打ち消され、彼女達だけが無事だったのだ。
「まったく違う魔法を同時使用するなんて」
別種の魔法を同時使用することは、熟練の魔術師でも難しい。
それにもかかわらずなぜレイブには可能なのか。それは、レイブには常識が通用しないということだ。
「さて……これで一段落かな」
レイブがそう呟くと、メイド姿の少女が倒れ込んでしまった。
「アリス!?」
倒れた少女を、もう一人の少女が抱きかかえる。
張り詰めていた糸が切れてしまい、全身の力が抜けてしまったのだ。
「よく頑張ったな……」
レイブは労いの言葉をかけ、アリスと呼ばれた少女へ手をかざす。
「【回帰魔法：クロノスヴェール】」
神々しい光がアリスを包み込む。
それにより、一瞬で傷一つない状態へと回復した。
いや、正確には回復したのではなく、時間が戻ったというのが正しい。

クロノスヴェールは回復魔法ではなく回帰魔法――対象の時間を戻す魔法だ。
アリスは、傷を負う前の状態へと戻った。
傷だけでなく衣服のダメージまで消えているのはそのためだ。
「これで平気かな？」
「今の魔法は……」
二人の少女が不審そうな表情を浮かべている。しばらく微妙な沈黙が流れたが、銀色の髪をした少女がはっとして告げる。
「あの……助けてくださってありがとうございました！」
銀髪の少女が深く頭を下げる。それにアリスも続く。
「いやいや！　二人とも頭を上げてくれ！　そんな大したことしてないから！」
「いいえ、貴方が来てくれなかったら、今頃わたし達は辱められていました……本当に感謝しています」
「そっか、それは良かったよ」
「はい。それで……」
「ん？　何かな？」
銀髪の少女がレイブを見つめて言う。
「あなたは、一体何者なんですか？」

4　今日までの自分にさようならを――

「え？　通りすがりの一般人ですが？」
「……」
さすがに苦しかったか。
まあでも、敵意や警戒心の類は感じられない。怪しまれてはいるけど、敵だとは思われていないって感じだな。
やれやれ、それにしてもどうしたものか……
俺は今まで自分の経歴を隠して生きてきた。それは面倒事に巻き込まれたくなかったから……というのもあるが、一番は俺の存在が知られることで争いが起きるのを避けるためだ。
いつの時代、どんな場所だろうと、強大な力が存在すれば必ずそれを巡って争いが起こる。これは二度の人生で学んだことだ。
「貴方が、悪人でないことはわかります……でも、わからないことがいっぱいあって。貴方が使った魔法はどれも高位のものばかり。それに知らない魔法まで使っていました」
「誰の目から見ても、貴方が一般人ではないのはわかります」

銀髪の少女に続いて、アリスが言う。
やっぱり回帰魔法まで使ったのは失敗だったか。俺が生きていた時代では、あの程度は当たり前のように皆使えたんだけどな。どうも現代だと、昔より魔術師のレベルが低くなっているらしい。
争いがなくなったことで、戦うための力を必要としなくなったからか。どちらにしても、この状況……どう誤魔化す？
銀髪の少女が真剣な眼差しで迫ってくる。
「助けていただいたのにこんなことを聞くのは失礼だとわかっています！　でも……どうしても、貴方のことが知りたいのです！」
な、なんだ？　急に深刻そうな顔になったぞ？
しかも迫り方が本気だ……これから告白でもされるのか？
「貴方なら、わたしを――」
俺は落ち着いて返答する。
「俺のことが知りたいのはよくわかった。でもな？　その前に自分のことを話したらどうだ？」
「あっ、す、すみません！　自己紹介もしていませんでしたね」
ちなみに俺についてだが、彼女に真実を話すつもりは、今のところない。
どうも訳ありなんだろうということは伝わってくるけど、誰かわからない他人に話すことはありえない。見たところどこかの国の貴族？　とかだろう。軽々しく話して噂でも流されたら大変だ。

ただ今回の一件で、俺の常識と現代の常識にギャップがあることがわかった。
それを修正するためには情報がいる。場合によっては、情報を聞き出せるだけ聞き出して、二人の記憶を操作して逃げよう。
銀髪の少女が一息ついて告げる。
「改めまして、わたしはアストレア皇国の第二皇女、リルネット・エーデル・アストレアと申します。そしてこちらが――」
「リルネット様にお仕えしております。アリス・フォートランドです。先ほどは助けていただいてありがとうございました」
こ、皇女だった!!
まじか、高貴な身分だとは思ってたけど、本物の姫様だったとは……
ていうか、アストレア皇国ってどこだよ！
俺が生きてた時代にはなかったぞ!?
「そ、そうか……皇女だったのか」
どうしよう、めちゃくちゃデカイ態度で話してたよ。
これってマズイんじゃないのか？　下手したら世界中のお尋ね者に――
「あの――」
リルネットが不思議そうな顔をして声をかけてくる。

「は、はい！　なんでしょうか？」
「いえ、わたしの名前を聞いて、敵意を向けなかった方は初めてだったので……」
「敵意？」
リルネットが口にした言葉に、俺は反応した。驚きとか畏れじゃなくて、敵意だって？
俺が疑問に思っていると、リルネットはさらに続ける。
「はい……もしかしてご存じないのですか？」
俺については一切明かさないつもりだったが、これは駄目だな。もう誤魔化しきれない……仕方ない、正直に話そう。
「申し訳ない。実を言うと、俺はつい先日まで小さな村に住んでいて、そこから出たこともない田舎者なんです。だから外の事情には疎くて……正直、貴女の国の名前すら知りませんでした」
「そうだったのですね……」
「なので、もし良ければ、さっき言った、敵意について教えてもらえませんか？」
「……」
リルネットは明らかに躊躇している。
よほど人に話したくないことなのだろう。きっと並々ならぬ事情があるに違いない。
気になる……だけど――
「無理なら別に構いません。誰にでも言いたくないことはありますから」

俺がそう言うと、リルネットは俯いてしまった。アリスがリルネットに声をかける。
「リル様……」
「大丈夫だよアリス、話しましょう。この方には知っていてもらいたい」
真剣な眼差しで俺を見つめるリルネット。
そしてゆっくりと口を開く。
「実は……わたしは普通の人間にはない特別な力を……特別な眼を持って生まれてきました」
特別な眼？
人間だったら千里眼、魔族なら魔眼といったところか。
かつてはありふれていたはずだが、まさか現代じゃその程度すら希少になってしまったのか？
「この眼は、本来は見えないものを見ることができます。他人が保有する魔力、身に纏うオーラ……そして、他人の考えていることまで」
「無知ですみません。他にその眼を持っている奴はいないのですか？　もしくは全く同じじゃなくても、似たような何かを持っている奴とか？」
俺がそう口を挟むと、リルネットはさらに続ける。
「そうですね……私と同じように他者の心を覗いたり、目に見えないものを見たりできる眼を持っている方は存在します。ただ、わたしの場合は、そのどれとも異なります」
「と言いますと？」

「本来、眼に力を宿した者は、自分の意思でその力をコントロールできるんです。だから、何もしていない時はただの目と変わりません。でも私の眼は……何もしていない状態でも、なぜか心の中が見えてしまい、その声さえ聞こえてしまうのです」
えっ、ちょっと待てよ……それってまずくないか？
さっきまでの俺の考え、というか今こうして考えてる声も聞こえてるんじゃ……
「そ、それって誰でも？　常になのですか？」
「はい、オーラや魔力を見ることはできませんが、心の中だけは常に見え、聞こえてしまいます。ただアリスのようにこの指輪を付けていれば、私の眼の効果は無効化できます」
よく見るとアリスの左手中指には、変わった指輪がはめられていた。
「ですが普通の人間では――あれ？　そういえば、貴方の心の声を一度も聞いていないような……」
二人の視線が俺に刺さる。
「間違いないです。今さら気付きましたが、貴方からは一切心の声が聞こえません」
意外な流れから、二人にさらなる疑問を抱かせてしまった。
いや、でもしょうがないだろ。その手の能力は俺には効かないんだよ！　仮にも元勇者で元魔王だからな。そのくらいの耐性も対策も持ってるに決まってるだろ。
「そ、そうなんですか？　いや～不思議なこともあるもんですね～」
「……わかりました。話を元に戻します」

良かった、突っ込まれずに済んだぞ。
リルネットが空気を読める良い子で助かった。
「わたしはこの力のせいで、幼い頃から賊に狙われてきました。幾度となく攫われ、その度に国に、皆に迷惑をかけてしまいました」
「……」
「周囲の人達は、こんなわたしにも優しく接してくれます……でも、心の中でどう思っているかも知っています」
悲しい話だな。
望んで力を手にしたわけでもないのに、それに振り回されてきたんだろう。特別だとか言われて……
「辛かっただろうな」
「ええ、でも仕方がないことだと割り切っていました。そんなある日のことです。皇帝……父にイルレオーネ王国の王都へ行くことを勧められました」
「王都に？」
「はい。イルレオーネ王国の王都には優れた魔術師達がいます。王都ならこの眼をなんとかする方法が見つかるかもしれない。そして王都には魔法学園があります。そこへ入学し、魔法について学べば、何かが掴めるかもしれないと……」

「それじゃ、今は試験を受けに行く途中だったと？」
「はい。アリスも一緒です」
なるほど、そういうことだったのか。つまりこの二人は、俺と同じように王立魔法学園に入学することを目指していると……
そうかそうか。
それなら、逆に好都合かもしれない――
「大体の事情は理解できました」
二人が俺と同じ学び舎へ入学するなら、これからも関わりはある。正直さっきまで、二人の記憶を消して逃げるつもりまんまんだったけど……そういうことなら話は別だ！　この二人は使える。
俺は笑みを噛み殺して告げる。
「それじゃ、そろそろ積もりに積もった二人の疑問に、答えるとしましょう」
「えっ、よろしいのですか⁉」
リルネットが目を見開く。
「ええ、ただ、これから話すことは他言無用でお願いします」
「もちろんです！」
アリスもそれに同意する。一応、俺の能力で調べてみたけど、二人とも嘘はついていないようだ。
「さてと、どこから説明すればいいか……いや、見てもらったほうが早いですね」

「見る？」
「はい、貴女の眼は、他人の魔力やオーラが見えるんですよね？」
「は、はい、そうです」
「だったら、その眼で俺を見てください。それがこれから話すことが真実だという証明になります」
打ち明けようとしている内容は、きっとすぐには信じられないと思う。だから先に、俺の持つ魔力を見ておいてもらったほうが効率が良いと考えたのだ。
それに、彼女の眼についても気になるし、ちょうど良いだろう。
「わ、わかりました！　では――」
リルネットは両目を閉じる。そこから魔力を高め、勢い良く閉じた目を見開く。
すると彼女の瞳は、灰色から透き通るようなエメラルドグリーンへと変化した。そんな特別な眼で彼女は俺を見る。
彼女は驚きの声を上げる。
「す、すごい！　こんなの初めて見ました！」
彼女の眼には、俺から放たれるオーラと、身に纏う魔力が見えているはずだ。
それはまるでこの世界のものとは思えないほど強大で、偉大な輝きを放っていることだろう。
「なんて量の魔力！　なんて神々しいオーラなの！　これは――っ!!」

俺が顔を近づけると、リルネットは頬を赤らめる。
「へぇ～なるほど、これは確かに珍しいな。まさか……神眼（しんがん）を持ってる奴がいるなんて」
「し、神眼？」
驚くリルネットに俺は説明を続ける。
「そう。文字通り神の眼――天壌（てんじょう）に住まう神々が、地上の民を監視するために貸し与えた恩恵――それが神眼だ」
「神の眼……そんなものがあったなんて知りませんでした」
「そりゃそうだろう。俺が生きていた時代でも、そいつを持っている人間なんてほとんどいなかったからな～」
「えっ……」
リルネットは、俺の言葉の中にあったヒントに気付いたようだ。
俺は言った。自分が生きていた時代でも……と。
それが意味するものは……
「改めて自己紹介をしよう！　俺の名はレイブ・アスタルテ、一〇〇〇年前に勇者としてこの世界に召喚され、その三〇〇年後に魔王として転生した――元勇者で元魔王だった男だ」
「なっ!?」
「……」

二人は驚愕のあまり言葉を詰まらせる。
無理もない。むしろこれくらいのリアクションはしてもらわないと悲しいくらいだ。
こうして正体を明かすのは聊かリスキーではある。それでも明かしたのは、彼女達を通して現代の情報を得るためだ。
俺が知っている知識は、遠方の村から流れてくる噂や、誰でも知っているようなものだけ……あの村の中で暮らすなら、その程度の情報で生活には困らなかった。
しかし、これから向かう王都は現代世界の中心。中途半端な知識しか持たない状態では、すぐにボロが出てしまうだろう。そうならないためにも、現代に魔王や勇者の行動がどう伝わっているのか、いろいろ知っておく必要があった。
まぁそれ以前に、彼女が神眼を持っているとわかった時点で、正体をばらすか記憶を消して逃げるかの二択しかなかったんだけどね。
リルネットが声を上げる。
「一〇〇〇年前ってことは……初代勇者様!?」
「そうそう」
「その三〇〇年後ってことは……伝説の二大英雄の一人、魔王ベルフェオル様!?」
「そうそ――……えっ？」
予想していなかった一言に、俺は驚かされた。

立ち読みサンプル
はここまで

「っちょ、ちょっとまってくれ！　今英雄とか聞こえたんだが……もしかして魔王ベルフェオルのことを言ってるのか？」
「当たり前ですよ！　魔王ベルフェオル様といえば、今の時代を勇者様と共に作り上げたお方――英雄の中の英雄ですよ!?」
ど、どういうことだ？
俺の窺い知らぬところで、勝手に英雄扱いされているだとおおおおおおお？
いや確かにやってたことはそれに近いけど！
でも変だぞ？　俺は自分の計画を一部の信頼の置ける仲間と勇者にしか話していない。二人の様子だと、俺が勇者と協力してたことまで知っている感じじゃないか？
一体誰が広めたんだ！
まさか、四天王の誰かが……いやいや、あいつらが話すわけはない。ていうか、魔族側の誰かが話しても、人間達は信じないしな。
「あ、あのさ？　俺のことってどんな風に伝わってるの？　ていうか、誰が伝えたの？」
「え？　わたしもそこまで詳しくはないのですが、言い伝えによると、戦いを終えて帰還された勇者様が、全世界へのメッセージを発信なされて、その時に魔王様の計画も伝えられたと言われています」
あいつか!?